名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

第52回 『宗右衛門町ブルース』と北原謙二のふるさとソング

堀井六郎
絵・松本 浦

昭和58年当時、私は創刊されたばかりの月刊誌の編集業務に従事していましたが、印刷所で最終原稿を校了した後に向かうのが、四谷にあった「酔族館」という居酒屋でした。

そこでよく見かけたのが、すでに40代半ばになっていた私服姿の北原謙二、話しかけると気さくに応えてくれました。北原といえば、私が小学生だった頃、ヒット曲の『若いふたり』を中学生がすかしながら歌っていたことが思い出されます。

『若いふたり』がまだ大ヒット継続中の昭和37年8月、蔵王エコーラインの全線開通を祝して『あこがれのエコーライン』という歌が作られ、人気絶頂の北原の歌で発売されます。残念ながらヒットには至りませんでしたが、同曲のシングル盤B面に収録されていた『さよなら　さよならさようなら』（詞・星野哲郎、曲・山路進一）という『ふるさとのはなしをしよう』タイプの曲が、その10年後、別の形で注目されるようになります。昭和47年、浪曲師上がりの漫才師、平和勝次がこの歌のメロディーを拝借、サビの「さよなら～さよなら～」を残し、自ら全面的に歌詞を改変したレコードを自主制作します。やがて大阪ミナミを代表するご当地ソングになる『宗右衛門町ブルース』の誕生でした。

同年、寄席出身のぴんからトリオが『女のみち』を自主制作、5月にメジャーデビューすると、「二枚目、ソロ歌手、美声」の三大条件を無視したお笑い出身グループがあっという間にミリオンセラーを記録してしまいます。

レコード会社は「第二のぴんからを探せ」とばかりに情報を集め、目をつけたのが、『宗右衛門町ブルース』でした。平和勝次は、メジャーデビューのためにダークホースという即席グループを作ってレコード会社の意向に沿い、やはりミリオンセラーを達成します。

両曲とも大ヒットのきっかけは有線でした。

北原謙二が歌ったオリジナルの『さよなら～』と『宗右衛門町～』を比較したとき、最も大きな違いは「二枚目、ソロ歌手、美声」の三大条件よりも、歌詞に歌われている対象女性の違いにありました。

北原の歌で歌われているのは、一般の若い女性であり、平和勝次が想定したのは、彼が毎晩見ていた「夜の世界で働く女性」でした。グランドキャバレー全盛期、生活のために水商売に手を染める女性がまだ数多くいた時代です。

大阪から発祥した有線放送がレコード売り上げに大きな影響を与えるようになった昭和40年代後半、有線にリクエストを投じる大半がホステスさんでした。そこには、キャバレーやクラブという職場の中にホステスさんと歌手の共有できる空間が残っていました。

『思案橋ブルース』に準じて、「盛り場名＋ブルース」を3連12ビートのリズムと明るい旋律に乗せて歌うスタイルを世に広めた『宗右衛門町ブルース』ですが、大阪出身の北原謙二は陰の功労者かもしれません。

ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。『私的「昭和大衆歌謡考」』第4集『しあわせになろうね』（グスコー出版）が好評発売中